

越後日記

相馬御風

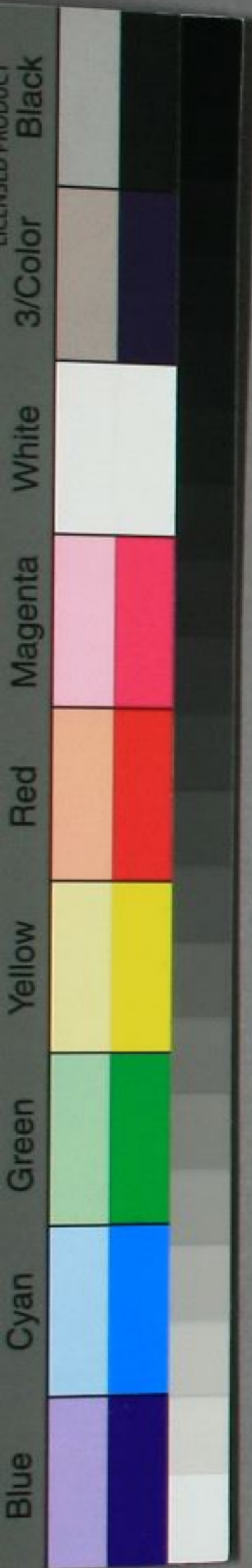


越後の九月、その事はからまへおけと、し
と、と大地の底までしみとほるやま雨が
降りつく。丁度早稲を刈るにこの雨には、
農家の人は全く困りぬいてゐる。

それは五月雨のやましめしめたいたいやま
感じはなく、全く文字の通り、地の底までしみ

とほらぬはやまめといったやま降り方の雨
もある。夜なかに目覚めて静にこの雨の音を
聞いてゐると、何か自分ひとりだけが何と
もいふ事もない世界の中に、ぼつと昔の外に
と一人置かれてゐるやま、やるせもない
孤独を感じさせられる。

孤独、ささくした孤独の
時、この全宇宙の海にみちみちと
の昔の夜に、あすかおほろの昔の
あまのつとむらさきことかある。それ
結してゐるのを聞く



それらの本や草みながら、
人の目の目を

れを見たりか見まいた、
まいたく見まいた、
こあらうか、それらも
うしてまいたく見まいた、
り安んずるなりして、
たつらに見えぬことは、
に感心、出来るだけ、
とめこ思ひやりたくあつた。
からとりつて、それらの

草を無闇と折つて帰つても
よらなかつた。

しかし、山を下つてから
た時、私達には全然とこの

美にうたれるあつた、
ある美しさが併せ感じられた。

そこに死ぬ、そして二たひと
ることのなからうところの

る美をみるあつた、
（九月二十九日）